

季刊

湘南自然誌

Vol.39

January 15th 2026

神奈川・湘南
地域の自然を
再発見する

特集 アオバト

荒波に揉まれる森のハト



アオバトのもう一つの物語

特集アナザーストーリー

四季のコラム

園児と自然に
触れ合う中から生まれた

園児や地域の皆さんからの
投稿写真を季節毎に掲載
湘南発 みんなでつくる！
生きものの図鑑

自然からのメッセージを子どもたちへ
平岡の自然教育の今

県立愛川ふれあいの村
吉田文雄学芸員によるコラム
心が育つ幼児教育

遊んで学ぶ生きもののこと
知育ゲーム

四季のコラム 秋(1)

本誌発行元の平岡幼稚園の園便りに掲載したコラムを一部改編してお届けします。

文／堀田佳之介（平岡幼稚園 園長）

子どもたちの想像力をかきたてる

秋のフィールドの落とし物



今秋、フィールドに出掛ける度に「面白いと思った自然物」を拾ってきてマイコレクションを作ってきました。私のデスクの上に置いた仕切りケースに、コツコツと足していったところ、「これなあに?」「おもしろい!」と多くの園児が興味を持ってくれるようになりました。魅力あふれる自然の造形美。眺めたり、触れたりするだけでも、私たちの心にさまざまな彩りを添えてくれます。自然の温もりがたくさん詰まった、フィールドの“落としもの”。親子で楽しめるので、ぜひおススメしたいです。

- 1／ヒシの実 忍者道具“マキビシ”にもなる鋭い棘を持つ。よくみると動物や怪獣の体や顔のようにも見える不思議な実。
- 2／タイサンボクの実 マイクのような形をしていて、子どもたちのごっこ遊びにもよく利用される。
- 3／フジの実 種子は固く艶があり、碁石のような乾いた音が魅力的。「お金（硬貨）」に見立てる子も。鞘（さや）は乾燥させると木片のように固くなる。
- 4／エビフライ（アカマツの実）リスが“松ぼっくり”を食べた後に残った芯。そっくりすぎて驚きだ。
- 5／トチノキの実 栗饅頭のような温もりのある質感が魅力的。
- 6／ムクロジの実 ガラス細工のような透明感が美しい。種子は羽子

- 板の羽根になる。果肉は石鹸になるので、泡遊びをしても楽しい。
- 7／イスノキの虫こぶ “はらぺこあおむし”が果実を食べた跡のような不思議な穴が空く。（はこね・おだわら昆虫館でいただいたもの）
- 8／ヒマラヤスギの実 パラの花のドライフラワーのような美しい形。
- 9／シロバナヨウシュチョウセンアサガオの実 ポリユミーで奇妙な姿は、巨大なオナモミの実のよう。
- 10／ハクウンボクの実 コーヒー豆のような可愛い実。
- 11／ムクノキの実 熟すと藍色に変わり、干柿のような甘い芳香を放つ。
- 12／モミジバフウの実 漢字で“紅葉葉楓”と表わされるように、葉はカエデのよう。トゲは固く、奇妙な形が美しい。

No Insects No Life

俳優 香川照之さんの昆虫番組



昆虫の不思議や面白さ、昆虫が織り成す数々のドラマを熱く語る香川さんの番組「昆虫すごいぜ!」は、老若男女多くの視聴者の心をつかむ番組でした。昆虫が苦手な人が多い世間において、昆虫のイメージを大きく上げるとともに、全国の子どもたちから大きな支持を得ていた番組なので、観られなくなってしまったことをずっと残念に思っていました。

あれから3年、香川さんがYouTubeで新たな昆虫番組「香川照之のカーブル昆虫記」と「むしむしの森」を立ち上げました。形は変わりましたが、香川さんの番組がまた観られるようになり、これをきっかけに再び昆虫に親しみ子どもたちが増えてくれるのではないかと期待しています。

実は先般、香川さんやスタッフさんから、その「カーブル昆虫記」のロケにお誘いいただき、私ほか数名で参加してきました。終始笑顔が絶えない楽しいロケとなり、辺りが暗くなるまで虫を追いかけました。この動画の公開時期は数か月先のようですが、それ

までの間、他の動画が順次配信されるそうですので、ご興味のある方はぜひチェックしてみてください。



YouTube
「香川照之のカーブル昆虫記」
https://www.youtube.com/@kabre_insect



YouTube
「むしむしの森」By INSECT MARKET
<https://www.youtube.com/@mushimushinomori>

1 / YouTube 番組「香川照之のカーブル昆虫記」。
2 / 撮影場所は神奈川県某所。香川さんの昆虫に対する情熱が前面に出た撮影となった。3 / 撮影はあたりが暗くなるまで行われた。4 / 香川さんプロデュースの昆虫子供服ブランド INSECT MARKET による YouTube 番組「むしむしの森」。より幼い子ども向けの内容となっている。

※ 画像は許可を得て掲載しています

四季のコラム 秋(2)

本誌発行元の平岡幼稚園の園便りに掲載したコラムを一部改編してお届けします。

園内で初確認の鳥

平岡幼稚園に珍客がやってきた！



11月のとある日、平岡幼稚園のビオトープの管理作業をしていたところ、ウグイスに似た1羽の小鳥が木の上から落ちるように舞い降りてきました。あまり元気がなく、じっとして動きません。とりあえず写真に撮り、今号の特集でお世話になった鳥の専門家の斎藤常寛さんと金子典芳さんに見ていただいたところ、「センダイムシクイ」という鳥であることが判明しました。

この仲間はどれもよく似ていて、外見での判別が難しいようですが、センダイムシクイは頭に白っぽい線が入ることで見分けられるそうです。ちなみに「ムシクイ（虫喰）」の名の由来は、文字通り虫を好んで食べるため。「センダイ」のほうは、諸説あるようですが、鳴き声「チヨチヨビー」の千代（チヨ）→千代（センダイ）だとか。

本種は、日本では夏鳥（春～秋に見られる鳥）で、冬になる前

に東南アジアへ移動するそうです。ちょうど移動の際中に疲れ果ててしまい、一休みしようと平岡幼稚園に立ち寄ったのかもしれませんが、日頃子どもたちの遊び場となっているこの小さなビオトープが、センダイムシクイにとっては住宅地の中の貴重なオアシスに見えたのかもしれない。

- 1／平岡ビオトープで初確認されたセンダイムシクイ。
- 2／子どもが好きな虫たちは鳥の食べ物にもなるのだ。
- 3／住宅地の中にある平岡幼稚園だが、敷地内には緑が多いためか、色々な鳥が訪れる。過去には、センダイムシクイと同じく夏鳥の「ヤブサメ」が南下の途中に立ち寄ったことも（本誌Vol.23参照）。



平岡幼稚園 ツリーハウス

Education

in nature

自然の中で豊かな心身を育む



湧き水や井戸水を利用した水辺、豊かな植生が見られる園内。ひとたび散策すれば、子どもたちはいろいろな発見をしていきます。色彩鮮やかな野の花、さまざまな匂いや質感の葉、甘酸っぱい果実、幻想的な羽化 etc・・・昨日見られたものが今日も同じとは限りません。自分の考えや予想に反することもことがあるでしょう。自然はいつだって同じではない、だから子どもたちは夢中になるのです。



平岡幼稚園

いのちとふれあう教育

平岡幼稚園は、住宅地や耕作地に囲まれながらも豊かな自然が残っています。野生生物の棲み処（ビオトープ）として管理することで、子どもたちがたくさんの「いのち」とふれあいながら、日々園生活を送っております。



トトロのおうち

〒259-1212
神奈川県平塚市岡崎3024
学校法人平岡学園 平岡幼稚園
TEL: 0463-58-1188



website

アオバト

荒波に揉まれる森のハト



photo / Noriyoshi Kaneko

協力してくれたひと

● 金子典芳さん
(平塚市在住)



● 斎藤常貴さん
(茅ヶ崎市在住)

野鳥観察・研究グループ“こまたん”メンバー。日本野鳥の会会員（金子氏は神奈川支部幹事）。鳥類全般（特にアオバト）について豊富な見識を持つ。本誌では鳥類の同定でお世話になっているほか、本誌3号「アオバトが繋ぐ人の輪・自然の輪」は斎藤氏、11号「愛すべき湘南の鳥」は金子氏にご協力いただいた特集である。

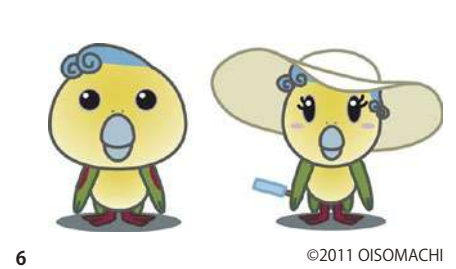
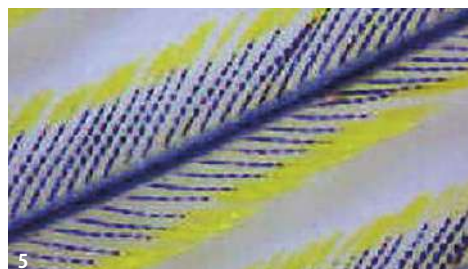
アオバトの鳴き声は「あお？」

アオバトは森の中にいると非常に見つけづらいが、鳴き声特徴的なので存在には気付きやすい。まず前奏のように、「オオゴアッ」と小さく鳴き、そのあと「オー・オー・オアオ・オアオ」と大きな声で鳴く。鳥類は一般的にオスは求愛などのためによく鳴き、メスはあまり鳴かない場合が多いが、アオバトはオスもメスもほぼ同様に鳴くのが面白い。（理由はよく分かっていない）

なぜアオバトと呼ばれるのか？

「アオ」と鳴くからという説と、緑色（昔は青と表現された）の体色からという説、もしくはその両方という説がある。ちなみに英名は「Japanese Green Pigeon」（日本の緑のハト）、もしくは「White-bellied Green Pigeon」（白い腹の緑のハト）。どちらも見た目が由来になっているが、和名の「アオバト」は鳴き声の「アオ」と体色の「青（アオ）」が重なった、絶妙なネーミングになっている。

ちなみに、メーテルリンクの童話『青い鳥』からの連想なのか、アオバトを「幸せの青い鳥」「幸せを運ぶ鳥」などと呼ぶ人もいるようだ。



写真…金子典芳氏撮影（1～4） 斎藤常貴氏撮影（5）

ハト目ハト科アオバト属

アオバト

学名：Treron sieboldii

英名：Japanese Green Pigeon（White-bellied Green Pigeon）

中国大陸、台湾、北海道～九州に分布するが、日本に生息するものは亜種として区別される。繁殖期には全国に分布し、冬は主に西日本で越冬をする。関東では、夏は標高 1,000m あたりで営巣し、一部は平地～500mほどの場所でも越冬する。海水を飲むという珍しい生態を持ち、山～海の移動を繰り返す。学名のsieboldii（シーボルトイ）は、新種記載された際に基準となった標本の採集者が、あのシーボルト博士であったことにちなむ。

1／アオバト♂ 2／アオバト♀ 3／眼は赤色、眼周りとは嘴は水色だ。4／英語で White-bellied Green Pigeon と呼ばれる通りお腹が白い。5／緑色の羽を拡大すると黄色と青色になる。6／大磯町のゆるキャラ「いそべえ・あおみ」

©2011 OISOMACHI

美しい姿のひみつ

アオバトは緑を基調とした、森林の保護色のような体色をしている（オスは羽の一部が赤褐色）。面白いことに、その緑色の部分を顕微鏡で拡大すると、緑はどこにも見当たらない。青色と黄色の羽が縞模様となることで緑に見えているのだ。

ほかにも、赤と青がリング状になった美しい瞳を持つのもアオバトの魅力となっている。また、脚の下の方、指が分かれるあたりまで毛でおおわれているのもアオバトの特徴だ。

神奈川県大磯町の照ヶ崎海岸に、はるばる丹沢山地の森から海水を飲みに行ってくる鳥がいる。アオバトといって、南国の鳥を思わせるような美麗な色をしたハトの仲間だ。積極的に海水を飲む習性を持った鳥はとても珍しく、日本ではアオバトとクラスバトの2種しかない。照ヶ崎海岸は一日で延べ三千羽を超えることもある日本最大規模の飛来地だが、ながらく一部の鳥好き以外、地元住民にもあまり知られていなかった。しかし、照ヶ崎海岸がアオバトの集団飛来地として県天然記念物に指定され、大磯町の「町の鳥」ともなり、アオバトをモチーフとした「ゆるキャラ」も登場するなど、今では地元住民に愛される存在となっている。

大磯町とアオバト

海水を飲む珍しい鳥、アオバト。長年鳥類の観察・研究に取り組む斎藤常貴氏と金子典芳氏の力を借りて、この鳥の魅力に迫ろう。

1



写真：金子典芳氏撮影（1・3～5）
吉田文雄氏撮影（6）

1／岩場に降り立ち海水を飲む様子。 2／アオバトは、丹沢山地と照ヶ崎海岸を結ぶ、大磯丘陵のグリーンベルトを通過して往復している。
3／森の中では姿を見つけづらいアオバト。 4／ハヤブサに襲われるアオバト。 5／「ノドアカ」と呼ばれる喉の辺りが赤いアオバト。ヒナに給餌した際の食べこぼしによる。 6／アオバトが食べる液果（写真はウワミズザクラの実）





彼らには海に行かなくては
ならない事情がある。

海へ行くのは果実食のせい?!

2

アオバトは大変「偏食」な鳥で、春から秋にかけては森で液果（水分の多い多肉質な果実）ばかりを食べている。この時期海水を飲みに行くのだが、これは、液果ばかりだとナトリウム不足になってしまったため、海水からナトリウムを補給しているのだと考えられている。

ただし要因は一つではなさそうで、同じ時期に行われる子育てに必要なビジョニミルク（吐き戻しによって与えられる栄養価の高い液体）を作ることとの関係も考えられるようだ。

ちなみに、冬は主にドングリを食べ、海には行かずに淡水を飲んでいる。

子育ては共同で

繁殖は春から夏にかけて丹沢山地の森の中で行う。通常一回に2個産卵する。親鳥は海水を飲みに行かなければならないため、巣が留守にならないよう、主に昼間はオスが、夜はメスが卵を抱くなど、交代で巣を守る。ヒナに与えるビジョニミルクも、オス・メス両方作ることができる。アオバトのヒナは、父母両方からたっぷりの愛情と栄養をもらって育つのだ。

出現率0.1%!

「ノドアカ」アオバト

照ヶ崎海岸でごくまれに確認されていた「喉が赤いアオバト」。齋藤氏と金子氏の仲間内では「ノドアカ」と呼ばれ、当初は突然変異?新種?など様々な憶測がなされていた。しかし今では、子育て中の親がヒナへ餌を吐き戻して与える際に、果汁が喉に垂れた跡だと判明している。出現率は0.1%ほど。出会えたら超ラッキーである。

森に守られ、森を作るハト

丹沢山地から照ヶ崎海岸までの約30kmを一時間ほどかけて飛来するアオバト。オスの集団が朝6時7時あたりにまず訪れ、メスの集団は少し遅れてやってくる。巣を留守にしないよう交互に来るのだ。道中オオタカなどの猛禽類から身を隠しやすいように、森林を伝って飛行していく。照ヶ崎海岸にとりわけ多く飛来するのは、丹沢山地と海岸の間を、大磯丘陵の森林がグリーンベルトとなって繋いでいるからだ。

緑の多い森の中では保護色となる羽も、海ではまったく役に立たない。そのため、照ヶ崎海岸ではハヤブサに襲われる姿がたびたび見られる。しかし、アオバトは他のハトに比べて尾羽が抜けやすく、猛禽類に掴まれても逃れやすくなっているようだ。果実食のアオバトは、丹沢山地と照ヶ崎海岸の間を飛行する際に、種子の入った糞を落とすため、森を作りながら往来していることになる。アオバトは、「森に守られ、森を作る」ハトといえよう。



photo/Noriyoshi Kaneko



残されたヒナたちを想っていたのだろうか？鳥の
本当の気持ちは分からないが、アオバトの生態を
知らなかったら、こんな想像力が働くこともなかつ
たし、そもそも存在にも気付かなかったはずだ。
皆さんもぜひ、来シーズン、春から秋の早朝の
照ヶ崎海岸を訪れてみて欲しい。この特集を読ん
だ後ならば、アオバトの朝日に輝く美しい姿を楽
しむだけでなく、その裏のドラマへも想いを馳せ
ながら観察を楽しめることだろう。

END

上左／上空を飛ぶアオバトの群れを観察
する様子（平岡幼稚園のアオバト観察会）。
上右／ハヤブサに捕らえられ、羽を散ら
すアオバトのメス。
下／荒波の中でも果敢に岩場に降り、命
がけで海水を飲もうとするアオバト。丹
沢の山々は穏やかでも、照ヶ崎の海は大
荒れの日もある。





海を求め、海にのまれる森のハト。
アオバトから過酷な自然の摂理を
垣間見る。

子の命を背負い荒波に挑む

3

台風が過ぎた後の照ヶ崎海岸で、浜辺にずらりとアオバトの死体が打ち上っていることがあるという。海水を飲まなければ生きていけないアオバトは、大荒れの海でも果敢に岩場へ降りていくため、時に波にのまれてしまうのだ。

もし子育て中だったら、残されたヒナはどうなるのだろうか？ アオバトは一度に2個卵を産むので、照ヶ崎で一羽の親が死ぬと丹沢山地では2羽のヒナが死ぬことになるのかもしれない……

お話を伺った斎藤常貴氏も、ハヤブサに襲われる姿など何度も見えてきたそうだが、荒れる海に自ら突っ込んでいき死んでいくアオバトを見るのは、なんともやり切れない気持ちになるという。生きものの観察は楽しいことばかりではない。理不尽とも思える過酷な現実を目の当たりにして、生きることの厳しさを感じたのだろう、氏も随分その手でアオバトを埋葬してきたそう。

命のドラマに想いを馳せて

実はこのアオバト、ある雨の日の朝に平岡幼稚園

園にも飛来したことがある。姿は見えなかったが、樹上から「オーオー・オー」と特徴的な鳴き声

が聴こえてきたのだ。早朝というほど早くはなかった。海岸から丹沢山地へ帰る途中に雨宿りし

ようと、樹木が少しまとまっている平岡幼稚園に立ち寄ったのかもしれない。どこか物悲しい鳴き

声に感じたが、荒波にのまれた仲間を、あるいは



photo/Noriyoshi Kaneko



荒波と戦うアオバトの飛翔に息を呑み
命のドラマを心に刻んでいく

Access



大磯町 照ヶ崎海岸

照ヶ崎海岸は大磯港のすぐ西側にある。大磯駅からも比較的近く徒歩で約12分。車で行く場合は有料の大磯港第1駐車場・第2駐車場を利用するのが便利だ。海が荒れている場合は、防波堤から観察しよう。

参考文献

- 『アオバトのふしぎ～森のハト、海へ行く』2019年度特別展展示解説書（編／松本涼子 著／金子典芳ほか 発行／神奈川県立 生命の星・地球博物館）
- 『アオバトのふしぎ』（著／こまたん 発行／エッチエスケー）



「こまたんスタイル」

観察会でも調査でもアオバトへは必要以上に近づかずに望遠鏡を設置。鳥にプレッシャーを与えないように気遣い、人と鳥の距離感を大切にするのが「こまたんスタイル」だ。



A / 大磯町のゆるキャラとコラボしたアオバト観察会。B / こまたん著『アオバトのふしぎ』（エッチエスケー） C / 神奈川県立生命の星・地球博物館と“こまたん”が共催した2019年度特別展「アオバトのふしぎ～森のハト、海へ行く」（7月20日～11月10日）の展示解説書。

Another story of アオバトのも

次々とアオバトの生態を
大磯町のとあるハイツ
趣味の探鳥会“こ



性といった、今までハッキリと分かっていなかった生態を次々と解明していったのだ。

アオバト伝道師 こまたん

研究だけでなく、アオバトが多くの住民に愛され始めるきっかけを作ったのも“こまたん”である。アオバトがあまり知られていないことから、照ヶ崎の観察会を積極的に一般市民へ解放し、アオバトについての講演会も開催するなど、「アオバト伝道」活動を行っていたのだ。そうした活動や研究が、大磯照ヶ崎のアオバト集団飛来地の県の天然記念物指定に大きく寄与し、今ではアオバトは大磯町の象徴となっている。“こまたん”なくしてはあり得なかったであろう。

40年続く情熱を次世代へ

“こまたん”は、野鳥観察への情熱を次世代へ継承していくこうと、鳥に興味を持ち始めた若者に惜しみなく知識や手法を伝え、自主的に観察活動を始められるよう育成していくことにも取り組んでいる。「1度でも参加すればメンバー」をポリシーとし、特に代表者も決めず、それぞれが自らのテーマで動いている自由な雰囲気を持つ“こまたん”。現メンバーの活き活きとした姿から、自然観察が人生を豊かにしている様を感じるのである。着々と活動を共にしてくれる若い世代が育っているようだ。活動開始から40年あまり、“こまたん”有志の情熱は、今も絶えることなく引き継がれている。

こまたん

● 野鳥研究・観察グループ

1983年創設の探鳥会。風変りな名称は「高麗探鳥会（こまたんちようかい）」の略称が定着したことによる。アオバトを中心に湘南地域の鳥類の観察や調査を行うほか、観察会や講演会、メディア出演等さまざまな普及啓発活動に取り組む。著書に「アオバトのふしぎ」（エッチエスケー）、メディア出演にはNHKダーウィンが来た！「命がけ！荒波に挑む森のハト」（2016年1月17日初回放送）などがある。

the special feature

う一つの物語

写真：こまたん 文：編集部

解明していったのは、
の住人たちが始めた
またん”だった。



1991 年、照ヶ崎海岸の防波堤にて



時には過酷な調査にも挑む

アオバトは丹沢山地で繁殖をする。そのため、山中に分け入って巣を探し、夜明け前から陣取って子育ての観察を行うメンバー。子どもでも楽しめる緩い観察会から、このような過酷な調査まで幅広くこなすのが“こまたん”だ。



“こまたん”の今～次世代へ情熱を伝える

「アオバト伝道師育成講座」の様子。ベテランメンバーが中心となって、若い世代へ実体験に基づいたアオバト研究の歴史と手法を惜しみなく伝えている。

かつて大磯の住民にもあまり知られていなかったアオバトを、地道に観察し続けてきた人たちがいる。その名は「こまたん」。このアマチュア野鳥観察グループが、のちにアオバト研究で次々と成果を上げていくことになる。

アオバトは「こまたん」抜きで語れない

現在知られているアオバトの生態の多くは、驚くべきことにアマチュア集団の「こまたん」によって解明されたものだ。たとえばその鳴き声に実は「前奏」があることを明らかにしたのも、ノドアカ（首が赤くなる個体）の正体を突き止めたのも彼らである。その成果の多くは、日本野鳥の会神奈川支部の研究年報B I N O Sなどに論文として発表され、日本のアオバト研究に欠かせない基盤となっているのだ。

「観察」にこだわり、プロセスを楽しむ

「こまたん」はあくまでもGPSを仕込むような鳥に負担をかける手法は使わず、あえて労力をかけることを選ぶ。そして、偶然的発見に出会うプロセスを楽しみながら、様々な謎に挑んでいく。一例をあげよう。かつてからアオバトは丹沢山地の方から飛んできていると言われていたものの、確かなことは分かっていなかった。そこに興味を持った有志で照ヶ崎海岸を飛び立つアオバトの行方を追ひ、どの山を伝っていくのか記録していった。しかし最後まででは追い切れず、「丹沢から来ている」と言い切るにはあと一押し「何か」が必要だった。その「何か」となったのは「アオバトの糞」だった。毎日のように照ヶ崎海岸の岩場で糞の調査を行っていたメンバーが、糞の中に丹沢山地の高いところにしかない樹木の種子が入っていることを発見したのだ。アオバトは確かに丹沢から飛んできていた。しかもこの糞調査は、アオバトが確実に果実食であることや、冬は照ヶ崎に来ていないことなどの大きな根拠ともなった。こうした地道なプロセスを楽しむ「こまたん」の研究スタイルが、飛行ルートや食